

じんけん瓦版

第 78 号

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

発行日：2022年4月17日

「正義を洪水のように 恵みの業を大河のように

尽きることなく流れさせよ」

(アモス書5章24節)

司祭 マリア山野繁子

1990年代は日本聖公会にとって、どのような時代だったのか。20世紀から21世紀にかけての大きな転換の時に私たちはどのような覚悟と決意をもって臨んでいたのだろうか。将来の世代の人びとが、私たち自身の歩みの中にあつた「こころざし」をふり返ると同時に、「同じ時を刻みながらも別の角度に向かおうとする意図もあつたのかかもしれない」という、人間の現実を見つめ検証する時に、忘れないでほしいと感じていることを記しておきたい。

1990年代の総会には主に二つの大きなテーマを、相反する立場から議論を尽くしていくという困難な課題を担うことになっていた。一つは第二次世界大戦中に日本聖公会が果たした役割を明らかにすることをとおして、第二次世界大戦終結から50年を経て、戦争責任の問題に誠実に向き合うこと、もう一つは、日本聖公会の働きの中に女性が司祭として参与することを認めるように、それまでの法規で司祭志願の要件の中にあつた「25歳以上の男性であること」という文言の中の〈男性〉を削除して、性別による志願要件を含まない、とする提案を認めるかどうか、という点だった。

当時の総会代議員の意見は、この二点とも意見の隔たりは大きく、合意に至るには大きな困難が予想されていた。90年代前半の総会では、主に戦責告白の問題が議論され、1995年に予定されていた第二回宣教協議会に向う姿勢も二分されていた。

1995年8月に清里の清泉寮で行われたこの協議会は、当時の「社会正義に関連する六委員会」(註)が中心になって準備が重ねられていた。協議会の中での討論でも厳しく対立した場面を重ねながら、最終的には大枠において準備された提案に沿った決議文が採択された。過去への反省・謝罪だけではなく、21世紀の教会を神の導きの下に歩んでいこうという前向きな方向

を共有するものであつた。この日本聖公会の戦責告白は96年総会で決議された。(90年代後半は、戦責告白文を諸教会に宛てて送付し、実質化することが大きな課題であつた。)

それらと併行して、いよいよ女性の司祭按手に向けての運動が、署名運動も含めて最終段階を迎えていた。98年の総会では、議案も整い、結論を待つまでの討論も熱を帯びたものとなった。但し結論に伴って実際に運用する上での混乱を避けるために付け加えられたガイドラインを巡る議論は、担当委員会が用意したものとは別の対案もあり、全体が採択されるまでには長時間のハードな議論が続いた。

最終的に「個教会・個教区は女性の司祭按手に反対の意思を表明することができる」ことを含むガイドラインが、女性の司祭按手に道を開く法規改正と同時に決議された。(その後20年を経て、2018年の総会においてガイドラインは全面的に改定された)

そして、この98年総会の中で、もう一つ用意されていた議案が最後に素早く提案されたように記憶している。それはそれまでの日本聖公会としての社会正義に関する課題を担ってきた「六委員会を解散する」というものだった。その背後には管区として六委員会の採算上の壁も立ちだかっていたのかもしれないが、この時点では丁寧な議論がなく結論ありきのように採択された。このことは、90年代前半から、正義と平和委員会の委員長を担っていた私の心に疑問を残すことになった。今後に向けて日本聖公会総会のあり方、宣教体制のあり方を注意深く、検証していくことを願っている。

その後の管区での宣教体制について

2000年以降はそれまでの六委員会が一つの正義と平和委員会となり、その中に各課題に担当者1名が置か

れた。新しく加えられた分野は環境問題と人権問題だった。2006年には「女性デスク」が加えられた。管区の担当者と各教区内の宣教担当主事の間で、密な連携を図ることが期待されている。

これら管区と各教区の担当者は、情報共有と意思疎通を図ることが求められ、全体的な視野での協議の場としては宣教協議会が10年余に一度位の頻度で開催されるものと考えられている。(2000年以降では、2013

年に開催され、次回は2023年の予定。)

どうか聖霊の力が注がれて、わたしたちに勇気と行くべき方向が示されますように。

註：本稿の中の「六委員会」は、天皇制問題委員会、靖国神社問題委員会、部落差別問題委員会、日韓協働委員会、学生・青年運動協力委員会、正義と平和委員会を指している。

HIV/AIDS が治療できる病になったとされる今も差別と偏見によって、苦しむ人々は依然として多くいます。人権委員会は、世界エイズデー（12月1日）に近い日に、カトリック中央協議会 HIV/AIDS デスク、宗教と LGBT ネットワーク、ルーテル HIV/AIDS プロジェクトと共催で、HIV/AIDS の方々と共に祈りを捧げています。昨年、27 回目の礼拝をオンライン配信により実施することができました。世界エイズデー礼拝における、長谷川博史さん（HIV 陽性者ネットワーク ジャンププラス スピーカー）のメッセージを以下に掲載します。

第 27 回 世界エイズデー礼拝メッセージ

私は、今から約 30 年前に HIV に感染し、そこから患者の活動を始めてまいりました。現在 69 歳になるんですけども、まさか当時はここまで長生きできるとは思ってなかった状態でした。同時に同じ病院に通う友人たちを次々に見送っていく毎日でした。そんな中でおかげさまで何とか 最初の薬 AZT っていうたった一つの薬で半年命をつないで、その次に出てきた薬で半年命をつなぎ、そしてその二つの薬を合わせ技で飲みながらなんとか 3 年間生き永らえた。そして、新しい薬にたどり着いたわけです。そして今振り返ってみると 30 年ここまで歩んできたわけです。当時、まさかここまで長生きできると思っていなかった私は、最初は自分のセクシャリティであり、ゲイであることを否定的に捉え、HIV に感染したことと関係して、自分の存在自体、自分のセクシャリティ自体を否定しようとしたんです。私自身は性感染で男性同性との性行為によって感染しました。当時、私の中には性に対する嫌悪感がありました。さらに自分がゲイであるということを、当時まだ十分に引き受けてなかったんじゃないかと思えます。そしてさらに、私自身がエイズという病気自体に対しての強い偏見を持っていました。その三つのうち特に大きかったのはエイズという病気への偏見でした。

私は二十歳から、自分のセクシャリティを家族、そして友人に少しずつカミングアウトしてきて、30 代後半にはほとんど自分のことセクシャリティをオープンにしている状態でした。ですから自分がゲイであるというセクシャリティは当時は問題なかったわけです。ただその生活の中で

当時交際していた男性と HIV を感染するような性行為をしてしまった訳です。

当時コンドームを使えば避けられるということ、もうすでに分かっていた訳



長谷川博史さん

ですけど、92 年の段階で。ところが、やはりそれを守らなかった。どこか自分の問題ではないという、他人事だという意識があったんじゃないかな。HIV に関して、改めて恐怖は持っていたものの本当にちゃんと理解しなかったんですね。ただ単に怖い。怖いから検査に行かない。当時検査に行くのは何のためか？自分が感染してないってことを確認しようとして検査に行ったんですね。ところが予想に反して自分が陽性だった。しかも、その当時交際していた男性のパートナーから感染したっていうことは、後でわかるんですけども、まず自分自身がゲイであるということを責めました。しかし、それはもう変えようがなかった。そう考えて自分のセクシャリティの問題にはそれなりの決着をつけました。社会的にも個人的にも。

残る問題は生き死にの問題です。本気で自分が死ぬことを考えてこなかったんですね。ということは、本気で自分が生きるっていうことも考えてなかったんだと、その時に気づきました。初めて、自分の死というものに向き合ったわけなんです。39 歳にして。そして考えていく中で「なんでこんな病気になったんだ？」「なんでこんなことになったんだ？」「なんで？」「なんで？」と自分の頭の中で疑問が渦巻くんですね。常にギューーっと湧いて出てくるんですね。その時に、「自分がゲイだからか？」「自分が淫らなセック



スをしたからなのか?」。そんな思いが頭の中に溢れていました。しかし問題はそういうことじゃなくて、単にコンドームをしてなかった。つまり HIV というウイルスが現実存在しているということを見ようとしなかった。そこに自分の問題があるって気づいたわけです。そして、HIV という問題を通して自分が死と向き合っていることに気づいたわけです。そして同時にその時初めて、自分の死というものに向き合った。後で考えてみるとその時初めて僕は自分の生とちゃんと向き合ったんだと思いました。

今日は、一人の友人のことを話させていただこうと思います。エイズというのは、複数の沢山の病気、カポシ肉腫であるとか、カリニ肺炎であるとか、健常者が持っているウイルスに対抗する免疫の力が弱ってくることによって、通常は問題のない弱いウイルスや細菌が暴れ出してくる、それが致命傷となって亡くなっていくんですね。これらを日和見感染症と言ってその相性を AIDS(免疫不全症候群)と呼びます。そうすると、一つの治療をしても次の病気が出てくる。そしてそれを直すと、今度は別の病気が出てくる。当時はそういったモグラたたきのような治療でした。

そんなこんなな病気に立ち向かうために開催されたのが国際エイズ会議でした。1994年に横浜でその国際会議が開催されました。世界中から、エイズに関する医療者、科学者、ソーシャルワーカー、そして沢山の HIV 陽性者の当事者が参加しました。1994年当時は残念ながら効果的な治療法がなくて、発症すると患者はどんどん衰弱して亡くなっていくばかりだったんです。

そして私個人も病院に行く度に、誰かの訃報を聞く。ひと月に1回病院に行くわけですが、行く度に病院の患者仲間の訃報を聞く毎日でした。エイズ会議の中では、陽性者ラウンジ、という PWA(People living with HIV/AIDS、HIV 陽性者及び AIDS 患者)のためのラウンジが設けられます。そこにはメディアも入ってこない。そういう形で HIV 陽性者のプライバシーが守られる。そこにはたくさんのボランティアの方がいらして、私たちをサポートしてくださっ

ていたんです。私はその当時ゲイ雑誌の編集長をしておりまして、プレスとして入っていったんですね。プレスであり、当事者であるということ幅広くいろんなところをみてまわったんですけど、その PWA ラウンジで運命的な出会いをしました。その人は、何かゴムまりみたいな快活な印象で、ニコニコ笑ってて、明るくてポンポンポンはじけてるイメージだったんですね。何か話かけてくださるんで、僕たちは世間話をしていました。そのうちお昼時になったんですが、横浜のエイズ会議は中華街とかレストランの皆さんが素晴らしい料理を提供してくださって、それまでのエイズ会議ではないような美味しいご飯が提供されたんですね。そうするとものすごい人数が並ぶんです。せっかちな私は並ぶのが嫌いで、「僕がご馳走するので外で食べよう」って彼女を誘ったわけです。その彼女が、実は榎本てる子さんという牧師さんでした。榎本さんは丁度カナダで、特にエイズで亡くなっていく人たちのケアをするボランティアをして帰ってきて、日本の中で、特に彼女のベースになった大阪や京都で HIV 陽性者、あるいはエイズを発症した人たち(当時はまだ、大雑把にエイズ患者って一括りにして言われてたんですけど)を自分の部屋の中に招き入れて安心できる場所を提供したりして、教会だけではなく、もちろん病院でのカウンセリングとか、そういう言う活動をする一方で個人的にも陽性者の心理的社会的支援をされてた。で、その活動の一部として横浜エイズ会議にもいらしてたんですけど、その時に私が出会って一緒にご飯を食べることになった訳です。そうは言っても昼休みの会議場ではカレーくらいしかないんですね、カレーを食べて二人で地べたに座って世間話をした。そうしているうちに、彼女が最初は何か距離が遠かったのがどんどん近づいてきたのか僕自身の感染してからの経緯とか何をやってるかって言う事を話していく中で、彼女が泣き始めたんです。『なんで長谷川さん、そんな元気なん?』『なんでそんなに強いん?』で、『わたしはそんな強くなれない』って彼女は言ったんですね。実は、私の場合、無所属・無宗派の仏教徒なので、ここに来るまで 10 か月間片っ端からいろんなお経の本や哲学の本を書を読んで、それで自分自身の混乱を抑えていました。そんな引きこもり生活の果てにふっと気付いたんです。「あ!自分は生きてる!」って。「死ぬ事ばかり考えるんじゃない、僕は生きてるってことに目を向けて、今ここにきてる。死は誰にだって皆平等にくるし、それはあなたも同じかもしれないね。」。私がそんな話をしたのは彼女が沢山のものを背負い過ぎてたと感じたからでし

た。エイズ患者さんの思いとか全てを支援者である自分が背負わなきゃいけないって思い込み過ぎてたんじゃないかな、って僕は感じました。そこから僕と榎本てる子牧師の交流は始まりました。それ以来 30 年の付き合いの中で、彼女は本当にたくさんの方のエイズ患者の、あるいは HIV 感染者のその心の声を聴いて、悩みを聴いて、ひたすら聴いて、癒し続けました。

彼女のお葬式がとても印象的だったんですけれども、お通夜と両方合わせて 1000 人を超える人が京都の教会に集まりました。その時、牧師さんたちの袴(タスキ)がレインボーの袴だったんですね。加えて法服が黒ではなくて、お葬式の黒でなくて白い式服だった。そして祭壇には、お花が、百合とかだけじゃなくて、カラフルな七色の花で飾ってあった。後で聞いたんですが、彼女が、たぶん私のお葬式には、キリスト教の人だけではなく、仏教の人、イスラムの人、いろいろな人が来るから本当にカラフルなものにして欲しい。そして、湿っぽいものにしないで欲しいというふうに言い残していたらしいんです。彼女らしいな。僕はつくづく思うんですけども、本当に彼女は自分の命を、自分の生を祝福して天国に上っていったんです。

(長谷川博史さんが 2022 年 3 月 7 日、69 歳で逝去されました。心からお悔やみ申し上げます。)

だから、今日のスピーチのお話が合った時に、彼女が亡くなって 3 年、「長谷川さん死なんといてや」といつも言ってくれた彼女に「自分が先に逝くなよ」って本当に思ったんですね。でも、彼女はいま天国で本当にレインボーな世界に生きて僕たちを見守ってくれているんだと思います。

彼女の死から学んだことは、死は人間としての命の終わりのかわりかも知れないけれど、ただそれが全ての終わりではないということ。そしてすべての人間に対して平等にやるものだという事。この二つの真理を彼女から教えてもらいました。私もあとどのくらいになるか分かりません。39 歳で感染して今年 69 歳、30 年になりました。日本でも性感染として 100 番ちょっとなんですけれども、多くの人を、病院で出会った仲間を見送りました。でも、私がここにいる意味は、榎本テル子牧師が教えてくれたように、まだ役目が残ってるんだと思います。その勤めが残ってる間は、せいぜいお役目を果たしていきたいなっていう風に思っています。そして皆さんと一緒にこれからも楽しく幸せに生きていきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

人権週間講演会

入管ボランティアと「恵みの交換」について

在留資格のない外国人が“不法滞在者”として長期収容されている入国管理センター。

ここには、本国に帰れば迫害される恐れのある「帰るに帰れない」難民申請者はじめ、多くの外国人が収容されている。こうした人々に、幾らかでも、小さな平安がもたらされるようにと神に祈り、面会ボランティアを重ねてきたが、ある時、収容されている人々の祈りにこそ、支えられていることに気づいたという。そして、非人道的な扱いと先の見えない不安に苦しむ彼らの声を「外の世界」へ届けようと、面会室に、ビデオカメラを隠し持ち、彼らの承諾を得て収録、ドキュメンタリー映画「牛久」を作成した。

入管にもっと目を向けて！ 自分たちの問題として考えて欲しい！

と訴えるトーマス・アッシュ監督に、入管の実態と映画作成の思い、そしてクリスチャン・ボランティアとしての信仰、「恵みの交換」の体験について話を聞く。

日時：5月21日(土) 14:00~15:00

場所：神田キリスト教会 (zoom 併用・右記 QR コードより)

講演：トーマス・アッシュ (1975 年生まれ。米国出身。聖オルバン教会教会委員)

問い合わせ先：東京教区人権委員会 佐々木國夫 (090-8593-6129)

